
僕の青春

藤乃 郡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の青春

【Nコード】

N4597D

【作者名】

藤乃 郡

【あらすじ】

親友に裏切られクラスの皆から変態という扱いをされる主人公、将の「暗いけどたまにはいい事ある」そんなこの学校でもありそんな青春ストーリー

ブローグ

いつまでも続くと思っていた。

いつまでもバイクで走り続けていたかった。

気がついたら

終わってしまっていた

それが僕の青春だった。

第一話：事の始まり

朝、母の声で夢から現実に戻される。

無理矢理に夢の世界から現実世界へと戻されても体に支障は無いみたいだ。夢の余韻にでも浸ろうかと思ったが、母から起こされたシヨックなのだろうか、夢の内容が思い出せないでいた。

仕方なく制服に着替えて、庭へと出る。

バイクのカバーを外し、鍵をさしてエンジンの暖気をする。

エンジンはかけたままで家の中へと入り、朝食を急いでたべ急いで用意をする。

これが僕のいつもの朝だ。

顔を洗い歯をみがくとヘルメットをとって外へと出る。

愛車のゼファー400はエンジンが充分に暖まったみたいだった。

そのまま学校近くの駐輪場まで直行し、教師や他の生徒がいないか確認してからヘルメットを脱ぐ。

今日も退屈な高校の始まりである。

教室へ入ると友人の仙石準が思い詰めた表情でかけよってきた。

「ちょっと来て」

そういわれて準の後ろをついていく。
到着したのは人気の無い渡り廊下だ。

「どうしたんだよ？」

僕は準にたずねた。

「やってしまったんだ」

準の答えの意味が全くわからなかった。

「お前が言ってた、う、上靴に…」
そこで全てを理解した。

「マジかよ!!」

『上靴に』とは、準が好きな小川彩という女の子がいた。

準が彩に告白したもののあえなく撃沈。

そこでふざけて

「上靴にお前の精子でもかけたら？」

そう僕が言っただのが始まりだ。

冗談のつもりだったのだが…。

「もう小川は来てるのか？」

俺は恐る恐るたずねた。

「わからない」

準はかなりどうしようもなく焦っているようだった。

「見てきてやるよ」

上靴に男をぶちまけられた女子の反応というものを見てみたかった
気持ちもあった。

彩のいる6組へと行き、教室の窓から確認する。

泣いていた。周りには女子が数人、彩を慰めているのか集まっていた。

その時、彩に睨みつけられた。

そして彩の視線に気付いたのか周りの女子からも睨みつけられた。

高校二年の11月、僕の青春は狂い出したのだ。

第二話：裏切り

その日はそのまま何事もなく終わった。

だが、動いたのは次の日からだった。教室へ入る。

クラスの皆の視線が僕へとむけられた。

一人の女子が僕へ近付いてくる。

「あんた最低ね！」

そう言われた。

何がなんだかわからなかった。

教室の外から明らかに不良の格好をした男子生徒がいた。

彩の彼氏だ。

「ちよつと来い」

僕は腕を引かれて人気の無い体育館裏へと連れて行かれた。

「お前、うちの彼女相手に随分調子乗った事してくれたみたいじゃん」

そう言われたかと思うと腹をいきなり殴られた。

「違う！あれは俺がしたんじゃない……」

へたりこんでいると次は蹴られた。

そのまま殴られ続ける。

授業開始のチャイムがなって彩の彼氏は教室へと帰っていった。僕は教室に帰れないまま一時間程その場でうずくまっていた。

二時間目が始まる前に教室へ戻ると、

「帰ってきたよ」

「また誰かの靴とかに…」

などという声が聞こえた。

僕は準へと顔を向ける。

準と目が会ったが気まずそうに顔をそらされた。

後から噂で聞いたが彩達が僕を犯人だと思っている事を利用して準が犯人は僕だと噂を流したらしい。

その日からいじめが始まった。

誰とも話せないし、男子数人に殴られたり、変態扱いもされた。

昼休みなど何もする事がないので図書室で過ごした。

放課後も帰っているときに不良に見つかると殴られるので人がいなくなるまで図書室で過ごした。

バンドを組んでいたのだが、同じ高校のヤツと組んでいたためか、自然的に脱退させられた。

これが1番悲しかった。

第三話：一つの光り

いじめは一週間も二週間も続いた。

当然まだ続くのであろうが、かなり辛い物がある。

まだ存在を無視されていた方が楽だ。

気がついたらもう十二月に入ろうとしていた。

今日も例の如く、昼休みに図書室へと向かった。

小説を適当に選んで席につく。

「ねえねえ」

本に熱中していて気がつかなかったが、僕の向かいに女子が座っていた様だ。

そしてその女子に声をかけられたみたいで顔をそちらへ向ける。

「お前は…」

同じクラスの高原幸だ。幸と書いてユキと読む。

「将くんでしょ？松本将くん」

久しぶりに名前で呼ばれた気がした。

ただそれだけの事なのに嬉しかった。

「何でこんな所にいの？」

僕の質問に彼女はいたら悪いのかという顔をした。

不思議だったのだ。

彼女はクラスの中心にいるような生徒であって人気者でもあるし、常にクラスを中心グループにいるのだ。

「なんだか最近疲れちゃってさ」

彼女がそう言った。

本当に疲れているのは僕の方である。

「人付き合いってやつ？なんか私、最近周りの女子からウザがられてるみたいなんだよね」

ま、松本君よりかはましか。とその後につけたされた。

「でも君はクラスでも中心人物みたいで人気者じゃないか。とてもそうには見えないよ」

僕がそういうと

「ま、表面上はね。高校生ともなるとあからさまな行動ってあんまり無いんだよ。それより君は普段からここにいるの？」

「うん。昼休みと放課後。不良に殴られたくないからね」

窓から入る光が彼女の色の抜けた髪をさらに赤くみせる。

「じゃあ、放課後またここで会おうな！」

彼女はそういうと図書室から出て行った。

不思議な奴だ。

第四話：友達？

放課後、僕は図書室へと向かった。別に、彼女に放課後会おうと言われたからではなく、それが僕の毎日の日課となっているから図書室へ来たのだ。

席につくとカバンからバイク雑誌を取り出して読み始める。

小説ならここや地元の図書館で借りればいいが、こういったバイク雑誌は買わないといけない。

気がついたら隅から隅まで、月に数冊、バイク雑誌とギター雑誌を買うようになっていた。

ツカツカと静かな図書室を歩く足音が聞こえる。

足音の方を確認すると彼女がいた。

「よっ！」

彼女が手を上げて挨拶してきた。

僕は手を上げ返すだけで口は開かなかった。

「松本君は小説とか好きなの？」

彼女が無断で僕の向かいに座りながら聞いてきた。

「好きだよ。ていうか、松本君なんて呼ばなくていいよ。どうせ君も影では僕の事をオナニー野郎とか馬鹿にしたふうに呼んでいるんだろ？」

僕の言葉に彼女は機嫌を悪くしたのか顔をしかめた。

「私は別に松本君の事をいじめるつもりはないよ！むしろその逆かな……」

「……逆？」

「友達になろうよ。読書友達。私もしばらくはココに通うつもりだからさ」

彼女は笑顔でそう僕に言った。

まだ5時なのに窓の外は暗くなっていた。

「普段は何時ぐらいまでここにいるの？」

沈黙を破り彼女が僕に聞いてきた。

「6時半ぐらいまでかな」

その後オススメ小説を聞かれ何冊か教えてあげたら彼女は黙って読書を始めた。

時計をみると早いものでもうすぐ6時半だ。

「なあ？」

僕が声をかけると彼女が本の世界から我にかえった。

「どうしたの？」

「時間。もう6時半だから僕は帰るけど」

僕がそういうと彼女はえっ？という顔で慌てて時計を見た。

「ホントだ！それよりこの本面白いね借りていっちゃんおうかなあ」

「やめといた方がいいんじゃない？図書室で読む本がなくなっちゃうよ」

僕は自分がすすめた本が褒められたのが嬉しかったのか少し笑いながらそう返した。

「私も帰るから途中まで一緒に帰ろうよ」

僕たちは二人で暗い廊下の中を下駄箱まで歩いて行った。

第五話：二人乗り

家は高校の近らしい。

僕はバイクがおいてある駐輪場へと向かって歩いていたら彼女も着いてくる。

「自転車できてんの？」

駐輪場の入口で彼女が僕に聞いてきた。

「バイクだよ」

僕は自分の愛車、ゼファー400の前まで歩いてゆき、鍵を外す。

「すげえじゃん！へえ、そんな趣味があつたんだあ……」

ヘルメットが一つしかないから二人乗りをするわけにもいかずに僕は彼女の家の近くまで押して歩く事にした。

「実はうちの兄貴もさあ、バイク乗ってて私も免許とろうかなあって思ってるんだよね」

彼女が突然口を開いた。

「へえ」

「あ、忘れてた。松本君携帯持つてるよね？」

僕が頷くと彼女が携帯を取り出した。

「ちょっとかして」

そして僕の携帯をうばってなにやらしだした。

「完了！小説の事とかいろいろと教えてね」

人気の無い道につくと彼女が急に立ち止まった。

口元で何やらしているみたいだ「タバコ？」

僕がそうたずねると彼女はうなずいた。

「松本君は吸わないの？」

「吸うけど学校には持ってきてないよ」

そうつげると彼女は僕にタバコを一本差し出してきた。

マイルドセブンみたいだ。

「今度返してね」

そこからはタバコを吸いながら歩いた。

タバコを吸い終えた所で、

「後ろ乗りなよ」

人の少ない所だしいいかという気持ちで彼女を後ろに乗せた。

彼女の案内をもとに彼女の家の近くまで乗せていった。

家に帰ると彼女からメールが着ていた。

『明日からは私のぶんのヘルメットも用意しとけよ』

僕はそのメールを見て少し微笑んだ。

友達が一人できたんだ。

だが、別に翌日からいじめが無くなるとかそんな事はなかった。

自分でもわかっていた事なので別に気にしていないのだが。

ふと高原の方を見ると気の毒そうな顔をしていた。

第六話：また落ちていく

「ねえねえ」

放課後、本を読んでいた高原が突然口を開いた。「何？」

「松本君ってお昼いつも一人で食べてるよね？」

「あたりまえじゃん。僕はいじめられてるんだから」

「今度から私と一緒に食べる？」

僕にはたまに彼女が何を考えているのかわからない時がある。

何故いじめられて変態扱いされている僕に関わろうとするのだろうか。

「屋上とかでさ」

「もし他の奴らに見られたら僕ばかりか高原さんの学園生活も終わりになるんだよ？」

僕はストレートな意見をのべた。

「うん。でも私自身が今の友達グループから疎まれてるからあんまり一緒にいたくないし、私達友達じゃん？」

次の日から僕たちは屋上で二人で昼食をとる様になった。

「そういえば、松本君さあ」

「何？」

「まだあのイタズラした子の事好きなの？」

僕は心臓が喉から飛び出そうだった。

イタズラした子…とはきつと彩の事だろう。

「…元から好きじゃない」
僕はそうボソリと言った。

「は？じゃあ好きでもない子にあんな事したわけ？」

彼女の声色から怒りという感情がうかがえた。

「信じてもらえないかもしれないけど、あれをやったのは僕じゃないんだ」

「じゃあ、誰がやったっていうの？」

かりにも準は元友人だ。

しかも僕はいじめられているからこの辛さがわかる。

ここで僕が準の名前を言えば僕はいじめから開放されるかもしれない。

しかし、逆に準はいじめられるかもしれない。

「…いえない。そいつは僕の事をもう友人じゃないかと思っているだろうけど、僕にとっては大切な友達だから言えない」

「松本君が泣いてるその子の顔をわざわざ違うクラスまでに見に行ったって話があるけど？」

「それは…」

否定できない。確かにそうしたのだ。

「…最低だよ松本君。」

そういうと彼女は去って行った。

第七話：転機

それくらい高原は図書室にはこなくなった。別に僕にとってはいつもの日常が戻ってきたただけだ。

夜、久しぶりに携帯の着信音が鳴り響いた。

準からメールが着たみたいだ。

あの日以来である。

『いままでごめん』

そうかかっていた。

二期終業式二日前の事であった。

メールには返信しなかった。

いや、する勇気がなかったし、学校でも話しかける事はできずに次の日は終わった。

そして終業式当日になった。

終業式が終わり、後は通知表を貰って帰るだけだ。

誰からも遊びに誘われず、勉強ばかりしていたためか通知表の中身は今まで以上になっていた。

さっさと帰りたいのに担任が話し始めた。

聞き流していると、

「急な話したが、仙石が家の事情で引越す事になった」
そう聞こえた。

僕は準の方を見る。

準が僕の方を向いて立ち上がった。

「急な事情で転校する事になりました。最後に皆さんにお話ししたい事があります。今、松本君が前の変態的な事件の犯人としていじめられています。実はあれをやったのは僕です。」

それから準が何を喋ったのかは聞いていなかった。

ふと携帯のバイブがなったので見てみたら

『放課後屋上で待つ』

と高原からメールが着ていた。

HRが終わってから僕は準に話しかけようと思って近付こうとしたが準は様々なクラスメイトから責められていた。

僕は準と話すのは諦めて屋上へと向かった。

屋上への扉をあけるとそこには高原がすでにいた。

高原は顔を下に向けたまま動かなかった。

「どうしたの？」

僕がそう聞いたら、涙ぐんだような声で

「この前はごめん…」

とつぶやいた。

「別にいいよ。最初から信じてもらえないかもってつけてたし」

僕はそっけなく返した。

窓から校庭を見ると準が一人でポツンとこちらを見て立っていた。

僕は準に手を振った。

第八話：現状

冬休みに入った訳なのだが、一応は進学校なため冬休みを削ってまで課外授業がある。

午前中で終わりだからいいのだが。

いじめの方は全てが無くなった訳ではないみたいだ。

もっともいままでいじめられていた奴がいきなり溶け込めるはずがないのだが。

放課後、図書室に行く必要があるかと聞かれればもう行かなくてもいいのかもしれないが、読みかけの小説もあったし、高原が来ているのか気になってつい足を向けてしまった。

図書室に入る。

さすがに冬休みだから早く帰って遊びたいのか、誰もいないみたいだ。

僕はため息をついて席に座ると読み掛けの小説を読み始めた。

どれくらいの時間がたったのだろうか気がついたら僕は眠っていたみたいだ。

向かいの席には小説を読んでいる女子、高原がいた。

「来てたんだ」

僕が声をかけると高原がこちらに目を向けた。

「おう。気持ちよさそうに寝てたじゃん」

ギクシャクした関係になるのかなと思っていたが高原は普通に接してくれた。

時計に目をやる。

時刻は2時。

「松本君お昼食べた？」

「食べてない。高原さんは？」

「私も食べてないんだよ。よかつたら一緒に食べに行かない？」
腹も空いていたし僕はその申し出を承諾した。学校から歩いてファミレスへと向かう。

「今日はお詫びの気持ちもこめて私がおごるからさ」

「別にいいよ僕は気にしてなかったし」

「そんな事言つて本当は淋しかったんじゃないの？」

凶星である。

「淋しかったし傷ついた」

僕は少し意地悪をしてやろうとそう言った。

高原は真に受けたようで

「マジでゴメン！」

と手を顔の前であわせて謝ってきた。

高原は少し頑固なところがあるみたいで「私がおごる」と言つてきかなかった。

僕は少し仕返しの意味もこめてファミレスで一番高い物を注文した。

「そういえば、じゃーん！」

高原が鞆から何かのパンフレットを取り出した。

「ん？」

よく注意してみると自動車学校のパンフレットみたいだ。

「免許？」

僕がそう聞くと

「ついにバイクの免許を取りに行くのだよ」と嬉しそうに言った。

「もう何に乗るか決めてるの？」

「まだだよ。何かオススメある？」

そこかしばらく僕のオススメバイク講義が始まった。

気がつくと空はすっかり赤く染まっていた。

「松本君ってバイクの話になると楽しそうだね」

「趣味だからね」

二人でトボトボ歩いて帰りながらもまたバイクの話をした。
冬休みが終わる頃には高原は免許を取得していた。

第九話：対決

冬休みも終わり、今日からまた学校が始まる。

僕がいつもの駐輪場へバイクをとめていると一台のバイクが横にとまった。

何回かこけたのであろう、ブレーキレバーとクラッチレバーがまがっている。

「CB400か。いかしてるじゃん」

僕はバイクの持ち主、高原に声をかけた。

「でしょ？松本君のバイクなんかブツチぎりだよ」

高原が笑いながら答えた。「コケてるみたいじゃまだただけだね」僕も笑いながらかえした。

冬休みが終わっても少しいじめられ、図書室で高原と本を読む日々はかわらなかった。

だけど事件はおこった。

駐輪場にとめておいた高原のバイクが無くなっていたのだ。

「…なんで」

高原は泣いていた。

その日、家に帰ってから親に

「少し遊んでくる」

とだけ言い残して出て行った。

高原のバイクを捜すために。

ナンバーは覚えている。

後はバイクを盗む様な奴を捜すだけだ。

僕は暴走族であろうと判断し、県内の峠を走り回る。

暴走族は峠の駐車場にたむろしているのがデフォなのだ。

何個目かの峠でたまたま暴走族の集団を見つけた。

僕は暴走族の後ろをついていく。

高原と同じカラーのCB400がいた。

ナンバーを確認する。

ビンゴだ。

だがここからどうすればいいのだろうか。

喧嘩で勝てる相手ではない。

暴走族の集団は広めの峠のパーキングへと入っていった。僕も後ろをついていつてパーキングに入る。

バイクをとめると高原のバイクにまたがっている男の方へと近付いて行った。

デカイ。

だが、バイクを盗むなんて許せない事だ。

「あれ？お前、松本じゃない？」

暴走族の中の一人が僕に声をかけてきた。

顔を向けるとクラスの不良がいた。

「何してんだよこんな所で」

「バイクを返してもらいに来た。あそこのデカいやつが乗ってるCB400」

「やめとけ。あの人はずちの特攻隊長でお前なんかが相手になる人じゃないよ」

「関係ない！バイクを返せ！！」

僕の出した大声で周りの注目が僕に集まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4597d/>

僕の青春

2010年11月6日20時17分発行